

蒼天のサムライ
第一部 端琉島脱出戦

田代裕彦

 OVERLAP



OVERLAP

竜部たらのぶシンヤの名を知らぬ者はない。

天津あま国建国の父にして初代国主。天津を解放し、救った英雄。その名は数世紀の後にまで燦然えいぜんと輝き続けた。

竜洞りゅうどうマスマミの名を知らぬ者もない。天津に生まれ育ちながら、最後まで竜部に抗い続けた裏切り者。天津人の汚点として、その名は歴史に穢けがれを残す。

史書で、講談で、舞台劇で。いつまでも語り継がれる。だが、本当にそうなのだろうか？

竜部が英雄、竜洞が汚点。その真実には一点のほころびも存在し得ないのか。ここに一冊の史書がある。いや、史書というよりは回想録とでも言うべきものだろう。その書に題はなく、俗に著者の名を取って『天堂偽書』と呼ばれていた。

偽書とは、本来その著者や製作時期などの由来が偽られている書物を指す言葉であるが、ここで言う『偽書』は、些いささか意味が違ちがう。書かれている内容が虚偽であるという意味での『偽書』だった。正確を期するために、『天堂騙書』と呼ばれることもあるが、ここではあえて『天堂偽書』という名を使いたい。

なぜなら、その名は天津国政府が認め、正史である『史正伝』にさえも登場する名なのだ。つまり政府にとって、その書の内容は偽りなのだと声高に叫びたかった理由があるということだ。

これより、その『天堂偽書』を元に、歴史の真実の裏に隠された、もう一つの英雄譚を繙いていこう。

第一章 天津焯国軍式等竜尉

天津焯国本土から一週間ほどの船旅であった。

竜洞マスマは、目を細め水平線の彼方を見やる。

そこには穏やかなさざ波がましいほどの小さな《島》だ。陸地などと言うのも鳥澁がましいほどの小さな《島》だ。

天津焯国は、比較的大きな三つの島とその周囲に浮かぶ中小の島々から成る群島国家であり、その中で最南端に位置しているのが、今、マスマの視界に映る端琉島だ。

端琉島は天津の南進政策の要と言われ、数年前から急ピッチで軍事基地化が進んでいる島でもある。将来、南方諸国との戦端が開いた折、戦略上重要な拠点となる……はずであったのだが、現在はある事情から《軍事基地》という言葉を疑いたくなるほどに、閑散とした有様を晒していた。

「……まあ、何にせよ、揺れない地面はありがたいかな」

独りごち、マスマは自然と自分の頬が綻んでくるのが分かった。

この一週間は、順調な船旅だったと言ってよいだろう。乗船時にこの古ぼけた蒸気往復動機関式の艦を見た時には、内心かなりの不安に陥ったものだったが、幸い最も大きな時

化の時に、わずかに気分が悪くなった程度で、嘔吐したり動けなくなるようなこともなかった。自分では分からなかったが、存外、船には強い体質なのかもしれない。そんなマスを見て、海兵たちが残念がっていたのには苦笑するしかなかったのだが。

まあ、仕方がないことだ。海のお古兵たちが、新参者のマスミにささやかな意地の悪さを覚えるのもよく分かる。なにせ、マスミは……。

「——竜洞式等竜尉殿」

やや胡乱な目つきで水面を眺めていたマスミの背に、きびきびとした声がかかった。マスミは未だ幼さを残した頬を引き締め、機敏な動作で振り返る。そこでは、三十がらみの大男が海兵式の敬礼を行いながら、直立不動の姿勢でマスミを見下ろしていた。

同年代の中でも身長の高いほうであるマスミでは、文字通り見上げるような形となったが、それでもマスミは返礼と共に胸を張る。

「何か？ 参等亀曹」

威厳を保ち、だが傲慢にだけはならぬよう気を付けながらマスミは三十男へ問うた。

「はっ。艦長のお言葉をお伝えに参りました」

男——参等亀曹から伝えられた艦長の言葉は、まったくもって事務的なもので、上陸に際しての注意事項であった。おそらくは、端琉島の南海諸島艦隊司令部で正式にこの艦に配属されることになるのであろうが、現状、マスミは未だ客分ともいえる身分であった。艦長としても何かと気を遣わざるを得ないのだろう。

「了解した。万事滞りなく遂行すると艦長にはお伝え願いたい」

「は。式等竜尉殿のお言葉、確かに艦長へお伝えいたします」

直立不動の姿勢を崩さぬまま、参等亀曹は答えた。

気を遣わねばならないのは、艦長に限った話じゃないか、とマスミはやや皮肉げに思う。この参等亀曹も、年齢はマスミより十以上年上であらうが、階級は五つも下だ。軍隊の常とはいえ、未だ十八にもならぬ小僧に礼を尽くし謙らねばならぬ男の胸中はいかほどのものであるうか。それを思えば、多少の嫌味や皮肉になど耐えて当然なのであろう。

「それと、式等竜尉殿……」

「まだ、何か？」

既に話は終わったとばかり思い込んでいたマスミは、参等亀曹の言葉に怪訝な声をあげてしまった。何より、彼の言葉がそれまでのきびきびとしたものではなく、不安……というよりは怯えすら含んだ声であったことが、マスミを訝しませた。

「は。式等竜尉殿の、その……愛騎のことなのでありますが……上陸後に艦の者の手で基地内の厩舎へと搬送する予定でありまして……」

なんとも歯切れの悪い言い様ではあったが、マスミには彼の言葉と、そして彼が怯えている理由がよく分かった。そして、この時ばかりは表情と口調を改め、

「そうでしたか。ご面倒をおかけしますが、よろしく願います」

「は。しかし、ご無礼を承知でお聞き致しますが、その……大丈夫なのであります」

か？」

参等亀曹の言葉は、何とも曖昧なものであった。正確な言動を求められる軍人にはあるまじきことではある。しかし、マスミは彼を咎めることなく、ふわりと微笑んだ。

「何、ご心配には及びません。あれは性格も穏やかですし、頭もいい。同胞を害するようなことはありませんよ」

宥めるようなマスミの言葉に参等亀曹はわずかに頷いたものの、納得し安堵した風でもなかった。仕方なくマスミは、最もこの男に伝わりやすそうな言葉を選び、口にする。

「あ……、つまり——よくしつけてあるのです」

マスミがそう口にした、その時である。

——クアアアアアアアアアア……ッ！

艦内に咆哮が響き渡った。

猛禽のように甲高く、それでいて野獣のように荒々しい叫び声だ。

参等亀曹は……いや、彼だけでなく、甲板上にいた多くの兵たちが、一瞬、体を震わせる。マスミの前の参等亀曹を始め、皆、屈強の海兵であった。その彼らが、怯え身を竦める姿はある種の滑稽さを漂わせてはいたが、その声を聞けば誰も彼らを笑えはしなかっただろう。心臓を直接鷲つかみにされるような、魂を噛み砕かれるような、そんな声だったのだ。恐怖が蔓延する艦内で、ただ一人マスミだけは笑っていた。頭を掻きながら苦笑を浮かべている。

「まいった。あれも相当な地獄耳のようです。動物扱いするなと、叱られてしまいました」

語る内容とは裏腹に、どこか誇らしげでさえあるマスミの言葉は、参等亀曹の耳に届いたであろうか。今、彼の目は見開かれ、その視線はマスミの背後、水平線の彼方へと注がれていた。

マスミがその様子を訝しむよりも先に、ざわ……と甲板上に波紋が広がる。

騒然となったわけではない。だが、甲板上に広がった波紋が、乗員たちに確かな緊張感を与えていたことは間違いない。

ざわめきの元を捜し、マスミは首を巡らす——と。

幼い頃より特殊な訓練で鍛えられた彼の鋭い視力が、空の一点に浮かぶそれを見出した。初めは点に過ぎなかった。だが、それはぐんぐんと速度を上げてマスミたちの乗る艦へと近付いてくる。今やその姿は、誰の目にも違えることなく映し出されていた。

全身を鱗で覆われた巨軀。

砕けぬものなどないと思わせる鋭い顎。

獣性よりも知性を感じさせる煌々と輝く眼。

蝙蝠を思わせながらも力強さを失わない翼。

そして、その背に跨る一人の少年。

それこそが、列強の脅威に晒されている天津防衛の要、煌国の誇る主力戦闘騎——。

竜。

その姿であり、それを駆使する竜士の姿であった。

「南海諸島艦隊所属の竜士殿と見受ける！」

その言葉はマスミの口から出たものではなかった。声の主を捜せば、いつの間甲板に上がったのか、この艦の副長が背筋を伸ばしたまま声を張り上げている。

「貴官の行動は、当艦の航行を阻害している！ 通告なく当艦に接近したのは、いずれか火急の故あっての由か!」

竜の恐怖を誤魔化すための虚勢なのか、それとも元々そういう質なのか、副長の声はひどく甲高く耳障りで、ヒステリックにさえ聞こえる。

竜士はちらりと副長を一瞥する。その顔は非常に整った造形ではあるが、目鼻立ちが鋭く、加えて三白眼ぎみでもあるため、余人に慥然とした印象を与える。反骨的人格を想起させる顔貌^{かおたち}でも言うべきだろうか。しかし、口元に浮かべた陽気そうな笑みが、それらの印象を塗りつぶし、全体的には《人好きのする容貌》として映るのが、この男の面白いところであった。

「申し訳ない、何も航行の邪魔をするつもりはなかった。ただ、兄弟の声を聞いた途端、こいつが言うことを聞かなくなってしまったね」

竜の首筋を軽く叩きながら竜士が軽く肩をすくめると、副長が嫌味がましい声を出す。

「それで言い訳のつもりかね？ もし貴官の言うことが真実であるのならば、竜士が竜を



手足のように操るといふのは誇大広告と言うべきだな」
 「なあに、竜に言うことを聞かせるのが一流の竜士の条件だが、愛騎の気持ちを汲んで好きにさせるのも一流の条件ということさ」

「口の減らぬ男だな。どちらにせよ、貴官の行動は処罰の対象にもなり得ることだ。官姓名を名乗られよ」

嫌味にも軽口で返す竜士に対し、副長もまた、頬を引きつらせながらも笑みを浮かべた。意地の悪げな、『勝者の笑み』とでも呼べるような笑顔だった。しかし、副長に問われ、竜士が浮かべた笑みの意地の悪さは、副長に倍するものであった。

「申し遅れた。小官は天津焯国軍南海諸島艦隊第五機動部隊所属、竜巢艦《ミクルベ》艦長、竜部シンヤ式等竜佐でございます」

「た、竜部とは、あの竜部か……?」

狼狽した副長の言葉は、竜士の名乗りを聞いた者ほとんどの代弁であっただろう。それほどに彼の名——正確に言えば、その姓——は、この時代の天津焯国にとって大きなものであったのだ。

「貴官がどの竜部を指して言っているのか知らぬが、おそらくはその通りだ。俺は、天津焯国四天将の一つ、東竜公・竜部が次郎シンヤである」

苦笑とも嘆息ともつかない吐息と共に、竜士——竜部シンヤは改めて名乗った。

マスミとシンヤの友誼は、もう十年以上にもなる。

マスミは竜士の本拠地である《竜洞》で育てられた子供であり、シンヤはその《竜洞》を所領とする竜部家の次男坊であった。どうしても竜士になりたいと、未だ五歳に満たないシンヤがただ一人《竜洞》まで赴いた時以来の仲になる。

身分差のある二人ではあったが、幼少時より同じ釜の飯を食い、竜士となるべく一緒に過酷な訓練を受けた仲でもある。

幼なじみであり、そして、親友だった。

この時は、まだ。

*

「竜洞マスミ式等竜尉。貴官に翌、〇六〇〇時をもって竜巢艦《ナガヌキ》に撃竜師範としての着任を命ずる。天津軍将校として焯王陛下の名を汚さぬよう、より一層の精励に期待するものである」

「はっ。竜洞マスミ、謹んで拝命いたします」

端琉島の南端。天津焯国軍南海諸島艦隊司令本部の一室でのことであった。

未だ少年とさえ言ってよい二人の若者が、向かい合い敬礼を交わしていた。命を与えた一方はともかく、受けたもう一方はあまりにも幼い顔立ちであったため、ある種の——例えて言うならば『ごっこ遊び』のような滑稽さがある。両者ともにそれに気づいていたが、

さりとして行わなくて良いというわけにもいかない。

なにせ、二人は《ごっこ》などではない本物の軍人であり、ここは戦地なのだ。

「……と、まあ。堅苦しいのは終わりだ。後は適当によりしくやってくれ、マスマ。」

命を与えた方の少年——竜部シンヤが、途端にがらりと口調を変え、あまつさえ手にしていた辞令書をマスマに向かって投げつけた。宙に漂うそれを慌てて受け止めながら、マスマはわずかに恨みがましい視線をシンヤへと向ける。

「相変わらずいい加減なやつだね。そんなことでよく『煙王陛下の名を汚さぬよう』なんて台詞が口に出せるものだよ」

「必要なことは伝えた。それで充分だろう。後はどれだけ言葉を費やそうが装飾に過ぎないからな。俺は中身の無い形式に興味はないよ」

「中身の無い形式が重要なことも多いと思うけれどね。特に、軍隊なんて組織だとき」

「それは承知しているさ。でも、今は必要じゃない。そうだろう？ それよりお前こそ、

一応俺は上官だぞ。その言葉遣いはどうかした方がいいんじゃないのか？」

「それこそ中身の無い形式だ。第一『堅苦しいのは終わり』なんだから、竜部式等竜佐殿？」

「相変わらず口の減らない奴だな」

皮肉めいたマスマの言葉に、シンヤは間違に笑った。そして、笑いを納めた後、マスマに向かって手を差し伸べる。

「とにかく、よく来たなマスマ。会えて嬉しいよ」

「それは僕もさ。……まあ、あの登場にはびっくりさせられたけどね」

笑顔を浮かべ握手を交わしながらも、マスマはわずかに肩をすくめる。クッションのきいたソファをマスマに勧めながら、シンヤも苦笑を浮かべ肩をすくめながら応じた。

「すまなかつたな。最近、事務仕事ばかりでちよっとくさくさしてたもんで、つい空を飛びたくなつたんだよ」

「ああ……。確か、竜巢艦の艦長だったね。どうだい、艦長席の座り心地は？」

「悪くないぜ……と言いたいところだが、やっぱり駄目だな。どうも、俺は空を飛んでる方が性にあってるらしい」

「そんなところも相変わらずか」

半年ぶりの再会であり、この間に互いの立場は随分と変わってしまったが、以前と変わらず友人の様子が、マスマにはなにより嬉しかった。

「……でも、それも言っていられないだろう？」

嬉しさはあっても、やはり立場もある。マスマがやや苦言のような調子も含めてそう言うのと、シンヤもそれまでの軽薄ともいえる表情を真剣なものに改め、「まあな」と嘆息と共に呟いた。

「さすがの俺も、乗員の命を預かるとなれば、そう面白い加減にやってもいられないさ。まあ、自分でも柄じゃないとは思うがな。むしろ、こういう役職はお前向きじゃないか？」

「まさか。一介の式等竜尉が艦を預かれるわけがない」

「それを言ったら俺だって同じさ。本来、竜巢艦の艦長は彦佐をもってその任に当てるんだからな。式等竜佐の俺じゃあ、階級が足らん」

そうは言っても、現実にはシンヤは竜巢艦《ミクルベ》の艦長である。その矛盾……というか、特例がどこから来るものなのか、当然、マスミは心得ていた。

「東竜公……か」

「そういうとき。《ミクルベ》は親父の艦だからな。俺が艦長をやることに何の問題もないってわけだ。……ったく、冗談じゃないぜ」

シンヤは吐き捨てるように口にする。

シンヤの得た特例は、何も艦長の件ばかりではない。シンヤとマスミは同年齢であり、同じ年に竜士となった。数年前の軍制改革で、竜士は最低でも参等竜尉の階級を授与されることになり、シンヤとマスミの軍人としてのスタートも参等竜尉から始まった。

それから二年。マスミは一階級上がった式等竜尉であるが、シンヤはそのさらに三階級上の式等竜佐である。この人事に誰よりも憤っているのは、他ならぬシンヤだったのだ。

天津煌国を牛耳る四つの将家、所謂《四天将》の一つである竜部家。シンヤは、一見その竜部の御曹司であることを利用し、自儘に生きているように見せているが、実際にはひどく生家を嫌っていることをマスミは知っている。

自分の実力で生きたいと、竜士になることを決意したことがその何よりの証拠であるように思えるのだ。

「まあ、どちらにせよ、僕に艦長なんて無理さ。自分の身を守るだけでも精一杯、他人の命までなんて、とてもとても」

友人の気分を変えさせようと、マスミはわざと冗談めかした口調でいった。だが、シンヤは真剣な表情を崩そうとはせず、じつとマスミの顔を見つめていた。

「そうか？ 俺はお前にならやれると思ってるぞ、マスミ。お前が艦長をやるのに足りないのは、ただ階級だけさ。それに引き換え俺は……」

胸の前で組み合わせた両の掌に視線を落とし、シンヤは陰鬱に呟く。

闊達で磊落。また、軽薄にも見せているシンヤに、内向的で神経質な一面があることをマスミは知っていた。長い付き合いになるが、こういった時、どんな反応を返せばいいのか、マスミには未だ分からない。その時である。

「そうですね。例えば、思慮深さでしょうか。あと、礼儀も足りないと思います。特に食事の時の作法といったらひどいものです」

なんとも居心地の悪い沈黙を破った救いの手は、幼さを感じさせる女の声であった。声の主を見た途端、マスミは驚きに目を見開いてしまった。

「あ、アユネ様!」

少女はマスミもよく知る人物だった。名を、竜部アユネ。東竜公の第三子であり、即ちシンヤの妹であった。緩やかな頬の曲線は、愛らしくもあったが何よりも幼さを表していた。それもそのはずで、彼女はシンヤと二歳違い、今年十五になったばかりのはずだ。

しかし、その幼さとも愛らしさともまったく不釣り合いなことに、彼女は今、マスマミと同じ鉄色の軍服を身につけていた。それどころか、尉官以上の将校にしか許されない帯刀まで行っている。

確かに、シンヤを慕っていたアユネは、兄の後を追うようにして、《竜洞》で竜士となる訓練を受けていた。とは言え、まさか本当に竜士となり、そして軍人となるなど、マスマミは——おそらくはシンヤも、考えてもいなかったのだ。だが、そのアユネは、紛れもなく軍人となって、今、マスマミたちの目の前にいる。

そもそも、このような少女が軍に所属していること自体が奇異に映るかも知れないが、この時代の天津煌国において、女性軍人は珍しくなかった。だが、それが竜部ほどの良家の令嬢となれば話は別だ。そもそも、一人娘を戦地に送り込むなど、父親である東竜公が許すとは思えなかった。

「あら。お父様は関係ありません」

マスマミがその旨を問うと、アユネは頬を膨らませながらそう言う。この時ばかりは、幼さに見合った、愛らしいふくれっ面だった。

「アユネはもう十五ですし、竜士としての免状も頂いてます。一人前の竜士が愛騎を駆って戦場へ赴くのに父親は関係ありませんでしょう?」

「何が一人前だ」

挑み掛かるような調子のアユネの言葉に、シンヤが苦々しく呟いた。

「そういう台詞は敵機の一つも墜としてから言うんだな」

「まあ! 竜士の善し悪しは撃墜数だけで決まるものではないと言ったのはお兄様じゃありませんか。現に……ねえ、マスマミ様?」

「ねえ、と言われましても……」

困ってしまう。二年前の煉王国との戦で初陣し、幾度かの戦闘を経験しているマスマミではあったが、実のところ、未だ一機の敵機を撃墜したこともなかった。

おそらく、シンヤがアユネに語ったという先の言葉は、そんなマスマミを庇うための言葉なのだろう。だが、そう言ってくれるのはシンヤくらいのもので、実情としてマスマミは竜士団の中でも《落ちこぼれ》として扱われているのだ。もっとも、マスマミが竜士たちの中で蔑まれてるのは、撃墜数以前の問題があるのだが……。

「マスマミは別だ!」

沈み込んでいこうとしたマスマミの意識を上向かせたのは、力強いシンヤの言葉だった。

「俺の戦果の半分はマスマミのものだからな」

マスマミと同じく二年前に初陣したシンヤは、初陣の戦闘だけでも五機、その後、幾度かの戦闘を経て、計十二機の敵機を撃墜していた。

各国の航空機開発技術が未熟であったこの当時、一騎の竜は五機の航空戦闘機に相当する戦力だとされていた。それ故に、竜士たちの間でも、五機の敵戦闘機を撃墜して初めて竜士として一人前だという風潮があった。そうだとすると、わずか数度の戦闘——実質半

年に満たない期間で十二機を撃墜したシンヤの戦果は赫々たるものだと言えるだろう。

確かに、マスミは幾度かシンヤの手助けをした。シンヤが攻撃を行いやすいよう、敵機を追い込んだり、逆に囮となつて逃げ回つてみたり。だから、シンヤが自身の戦果をマスミの手柄だと言つてくれる気持ちは分かるし、有り難いとも思う。思うが……。

「やつぱり、撃墜数は撃墜数だよ」

自嘲 気味に微笑み、マスミはそう言った。

「だ……だとしても、です！ 戦闘がないのでは、敵機の撃墜もなにもあったものではないのです。ああ……アユネも早く戦場に出たいです」

沈みがちになるマスミの気分を変えるためなのだろう、アユネはわざとらしく子供じみた台詞を口にした。そんなアユネに、すかさず兄が苦言を呈する。

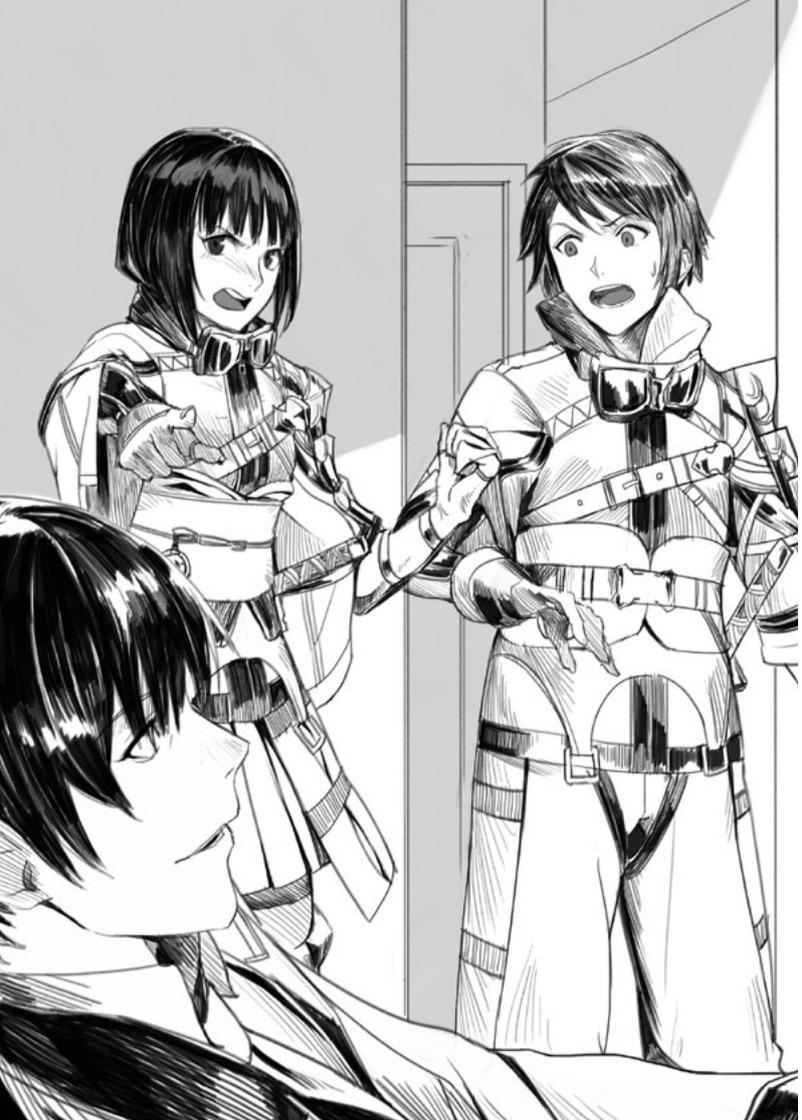
「戦を望むな馬鹿者。そんな不見識だから一人前だと認められないんだ」

「な、何ですお兄様ったら。軍人が戦を望んで何が悪いというのです」

「悪いね。最悪だ。戦争をするのは軍人の仕事だが、戦争を起すのは軍人の仕事じゃない。お前も仮にも将校なら、その程度のことは弁える」

「も、もうっ！ ちょっと、マスミ様、なんとか仰つて下さい！」

アユネは縋り付くように、マスミの軍服の袖を引っ張つてきた。シンヤが語っている内容はそれなりに重々しいものはずなのだが、アユネの調子がこんな風だから、どうにも他愛のない兄妹喧嘩のように見えてしまう。マスミは苦笑を浮かべつつ、



「いや、アユネ様。シンヤの言っていることは正論です。僕も同意見だ」

「ほら見たことか！ どーだ、アユネ。これこそが、一人前の見識というもののだぞ」

ふはははは、とシンヤがこれ見よがしに笑って見せると、アユネは頬を膨らませてソツポを向いてしまった。やはり、なんとも他愛がない。

その後、シンヤが追い払うように適当な用事をアユネに言い付けると、アユネは軍人の鑑であるかのような完璧な敬礼と共に退室した。もつとも、その後に兄に向かい舌を突き出して見せることを忘れはしなかったが。

「やれやれ。困ったじゃ馬だよ」

アユネが退室した後、シンヤは頭を振りながらそう言った。とは言え、その顔には微笑が浮かんでいいる。生家を——殊更に父と兄を嫌っているシンヤではあったが、アユネのことは昔から可愛がっていた。こんな場であろうとも、仲良く兄妹喧嘩の一つもできるのはやはり嬉しいようだ。もちろん、だからこそ軍人になどなって欲しくはなかったという思いも存在しているのであろうが。

「まあ、微笑ましくなってしまうのは確かだね。……でも、本当に良かったのかい？」

シンヤの心情を感じたマスミが訊ねると、シンヤの表情が苦々しいものへと一変した。

「アユネの馬鹿、どういう手段を使ったのか知らないが、親父を説得しやがったのさ。つまり、東竜公の鳴り物入りってわけだ。こうなれば、もう俺にはどうしようもない」

「本当かい!? この情勢でよくもまあ……」

現在、天津焠国は危機に立たされていると言って良い。煉王国を支配下に治め、世界最大の国家となったグロース帝国の侵攻が今か今かと迫っているのだ。そんな情勢で、軍人になりたがるアユネもアユネだが、それを認める東竜公も東竜公だ。

「その情勢ってやつさ。だからこそ、端琉島なんだろう」

シンヤは嘆息交じりにそう告げた。煉王国——現在は、グロース帝国の《オストエンデ州》と名を変えている——は、地理的には天津焠国の北西に位置している。よって、グロースの侵攻は北ないし西からのものだと考えられており、北や西の方面軍では大量増員が行われている最中なのである。逆に、天津最南端に当たるこの端琉島の南海諸島艦隊からは、兵員の引き抜きが行われていた。新たにこの地に赴任したマスミなどは、その引き抜かれた兵員の補充、ということになる。

こうしてみると、現在、南海諸島艦隊に所属する者は、大きく二つに分けられていることが分かる。一つは、アユネのように身の安全を確保するために、戦地から遠い場所へ隔離されている者。もう一つは、マスミのように《役立たず》と思われ、邪魔にならない場所へ追いやられている者であった。

「おかげでひどいものだ。危機感がないから、緊張感もやる気もないと来てる」

そう言ったのはシンヤである。やはり、艦長として一艦を預かり、乗員を指揮する立場となれば、文字通り《寄せ集め》である現在の南海諸島艦隊に不満もあるのだろう。

「そもそも、編成からして滅茶苦茶だ。南亀の連中に竜巢艦を任せるなんて、正気の沙汰

とは思えん」

シンヤの言う《南亀》とは、亀部家が支配下に治める天津の南方地方のことだ。天津の歴史を繙いてみると、事あるごとに南亀地方が東竜の攻撃を受けていたことがつかされる。この十八年前にも南亀地方で叛乱が起り、東竜公麾下の竜士たちがその鎮圧のために赴いていたのだ。

そのため、南亀地方出身者は竜と竜士を恐れ、嫌うこと大であり、殊に十八年前に幼少期を過ごしていた現在の二十代から三十代の人間には、その傾向が強い。

マスマが今日までの船旅を共にし、そして明日から正式に着任することになる、竜巢艦《ナガヌキ》の乗員などがいい例だろう。事情が事情とは言え、シンヤの言う通り、自軍の兵器の鳴き声一つに驚き怯えているようでは、まともな運用など望むべくもないことだ。「この分じゃあ、新設の《竜騎兵》とやらもどこまで期待できるものやら……」

天津焔国に《竜》は二種類いる。一方は、マスマたちが駆る《竜》であり、もう一方は《鳥竜》あるいは《翼竜》などと呼ばれていた。鳥竜は、竜から派生した下位種とも、竜の進化前の姿であるとも言われているが、真相は判然としていない。

竜と鳥竜の間に、外見的差異は少ない。体長、体格共に同等であるし、硬い鱗に覆われた全身も瓜二つと言っている。《鳥》の字から誤解されることもあるが、頭部に嘴がついているようなこともなく、蛇や鱈などを思わせる鋭い牙の生えた顎も同様だった。唯一の例外がその四肢であり、竜には両腕両足が揃い、背中から翼が生えているのに比べ、鳥竜

には腕がなく、肩口から翼が生えていた。まさしく「鳥のように」というわけである。

外見的にはその程度の差だが、目に見えぬところには様々な差異が存在する。

最も大きな違いは、知性の有無だった。竜は高等な知性体である。発声器官の差から、肉声で会話することは不可能だが、《沁話》と呼ばれる特殊な話法によって、人間との意思の疎通さえ可能なのだ。一方で、鳥竜の知性は獣並みという他なく、その思考は「食う」「寝る」「交尾する」の三種類に大別されてしまう。

これでは、鳥竜が竜の《下位種》だと言われるのも無理もない話ではある。

だが、竜は知性を持つがゆえに、誇り高く扱いづらいとされるのに比べ、鳥竜は比較的温和で従順であり、人間に使役されるのも厭わない。他にも、生後十年をかけて成熟する竜に対し、鳥竜はわずか二年で成体となる（その分、鳥竜は二十年ほどで寿命を終えるが、竜は長ければ百年は生き延びる）。だからこそ、戦闘兵器としては鳥竜の方が優秀だと見る声も少なくはなかった。

マスマたち竜を駆る者が《竜士》と呼ばれるのに対し、この鳥竜を駆る者は《竜騎兵》と呼ばれていた。……いや、呼ばれるようになった。

これまで、四天将支配下の天津では、竜に騎乗するのは《竜洞》の竜士たちだけに認められた特権であった。だが、四天将が天津を支配するようになって二百余年。ついに、その特権が崩れ去ったのだ。つい、半年前のことである。

専用の牧場で飼育された鳥竜が大量投入され、それを駆る竜騎兵が正式に新兵科として

認められた。煉国との戦争で竜士が大戦果をあげたこともこの動きにつながっていると云われるが、当の竜士たちはこの動きを快く思っておらず、竜騎兵を蔑む者も少なくはない。「仕方ないよ。時代の動きだもの」

マスミはそう言って、不満げな友人をとりなそうとした。

「分かっているさ。誤解のないように言っておくけどな、マスミ。俺は何も竜騎兵自体を馬鹿にしてるわけでも、その動員に反対してるわけでもないぜ。今、世界を相手に戦争をしようと思ったら、空戦力の増強が必要なのは誰の眼にも明らかだ」

戦争の舞台は陸から海へと広がり、そして今、ついに空へと移行しようとしている。二年前、極東の島国に過ぎない天津焠国が、かつては大国とも呼ばれた煉王国に勝利するこゝとができたのは、何よりも竜士たちの力であるし、現在、世界を席卷しているグロース帝国は航空機開発技術に長けた技術大国である。

だが、今の天津に航空機を開発する技術はない。皆無ではないが、仮想敵国であるグロース帝国の航空戦闘機と互角に戦えるだけの性能を持つ航空機は作れないというのが、冷厳なる事実であった。

天津とグロース帝国との技術の差はあまりにも大きい。一例をあげれば、天津の艦艇は蒸気往復機関式のもの主流を占めているが、グロース帝国では、より熱効率の良い蒸気流体機関式の艦艇が主となっているのだ。両者には十年、いや下手をすれば半世紀近い技術レベルの差が横たわっているかもしれない。

「竜を活用しなけりゃ、どうあがいても天津には未来はない。そんなことは分かっている。分かっているからこそ、不安もある。お前だって、そうじゃないのか、撃竜師範殿？」

マスミは明日から撃竜師範として、竜巢艦——竜や鳥竜の搭載能力を有した母艦——として改修された戦闘艦《ナガヌキ》に着任することとなる。この撃竜師範という役職は、《師範》の名に表されるように、同艦に搭乗した竜士や竜騎兵たちを指導する役割である。

「まあ……ね。《ナガヌキ》には、竜騎兵しかいないって話だから、不安は不安だよ」

「こんなことなら親父の力を使ってでも、お前を引き抜いておくんだったかな」

「おいおい、僕が君のところの撃竜師範になれるわけがないだろ」
シンヤの口調は冗談めかしたものであったため、マスミも肩をすくめながら軽く応じた。南亀公支配下の将兵で構成され、竜士も外部から呼ばねばならない《ナガヌキ》とは違い、東竜公麾下の《ミクルベ》には、熟練の竜士も多数配属されているはずだ。年若く、戦果にも乏しいマスミを撃竜師範として招聘する必要はないだろう。

「いや、言うほどでもないさ。竜士だって、一流どころは北部や西部に配属されているんだからな。《ミクルベ》の撃竜隊だって大半は竜騎兵だし——」

一度言葉を止めたシンヤは、そこで苦々しい顔つきの中に微笑の色合いを含めて続ける。「なにより、あの跳ねつ返りの面倒を見てくれるだけでもありがたい」

「アユネ様かい？ ははっ、そいつは勘弁だな。四天将家のご令嬢の相手なんか、僕には荷が重過ぎるよ」

マスマミが笑いながらもらした一言に、シンヤがきよんとした視線を向ける。

「なんだ？ お前、聞いてないのか？」

「え？ 何のこと？」

シンヤと同様、やや呆けたような表情と共にマスマミが友人に問い返すと、シンヤは片頬を吊り上げて笑った。

「西狗公の——狗部のところの娘が《ナガヌキ》に竜騎兵として配属されるんだよ」

「な、なんだって!？」

驚きのあまり腰を浮かせてしまったマスマミだが、シンヤの意地の悪そうなニヤニヤ笑いはとまらない。

「跳ねっ返りがいるのは、何も竜部だけの話じゃないってことさ。確か……トモエとか言ったかな。ガギの頃、宴で何度か見たことがあるが、扱いづらそうな奴だったぜ」

「じよ、冗談じゃあないよ……」

頭痛がしてくるような気分だった。マスマミは額を押さえ、崩れ落ちるようにソファへ沈み込んだ。そんなマスマミの様子を見て、少しだけ表情を改めたシンヤは、

「それに、《ナガヌキ》所属の撃竜隊は、大半が西狗公麾下の人間のはずだし、部隊長もナントカいう壱等狗尉だったはずだ。……もしかすると、厄介なことになるかもな」

この当時の天津焠国は、中世以来の四天将支配による多重封建制の影響が色濃く残っている時代であった。この頃が、天津が近代国家へと変わりゆく過渡期であったわけだが、

それゆえにさまざまな歪みや矛盾が生じるようになっていた。

軍の一事をとってみても、近代戦に耐えうるためにと、二十年ほど前に諸外国を見習って大幅な軍制改革が行われ、全將兵に明確な「階級」が与えられることになった。しかし、四天将が支配する地域の連合国家の様相さえ呈する当時の天津焠国では、統一された階級によってすべての將兵を区分することに様々な難点が残ったのだ。

そこで考案されたのが、「家印階級制」である。

天津焠国軍の階級は、おおよそのところで他国のものと大差はない。例えば、マスマミの式等竜尉は諸外国で言う《中尉》のことであり、シンヤの式等竜佐は《中佐》に相当する。ここまでは問題ない。問題となるのは、階級を示す尉や佐の前に記された《竜》の一字だ。《竜》とは、即ち《竜部家》のことである。つまり竜尉や竜佐は、取りも直さず竜部家の家臣であるということを示していたのだ。

そもそもこの『家印階級制』は、四天将が自身の家臣に階級を与える際、皆が皆、他家の家臣より勝るものを与えたがったという、つまらない意地の張り合いから生まれていた。これは、後世の歴史家のみならず、当時の人間すら冷笑するほどの馬鹿馬鹿しい話だったわけだが、馬鹿馬鹿しい話だけに、制定された後も数多くの欠陥を生じさせていた。

第一に、本来絶対的なものであるはずの階級が、四天将家の勢力の強弱に影響されてしまうことがあげられる。焠曆二二五年現在、四天将の中で最も勢力が強いのは西狗公・狗部家であった。それと拮抗するように竜部家が並び、逆に最も勢力が弱いのは、十八年

前の叛乱で疲弊した亀部家であった。そのため、「同階級であるのならば、亀より竜や狗の方が上」という認識が暗黙の了解として存在していたのだ。

他にも、国の位と家の位が矛盾した時、家の位が優先されるといふ問題点もあった。例えば、シンヤは東竜公の息子である。そのため、階級に《竜》の一字を持つ者は、仮令シンヤよりも高い階級だとしても、彼を主君のご子息として引き立てねばならない。このことから「武等竜佐に頭を下げる吉等竜佐」という図が成立してしまうのだ。

もちろん、シンヤはそれを望んだりしないだろうが、彼が望む望まざるとに拘わらず、そう、いうことになっているとしか言い様のない現実だった。

これは、シンヤに限った話ではなかった。マスミと同じ艦に配属される狗部家の令嬢が、シンヤと同じように家格を嫌うというのなら問題はない。しかし、家格を笠に着て好き放題するような人物だったらどうなるのか。それを考えただけでマスミは頭が痛かった。

「……アユネ様に振り回されているほうがいくらかマシだったかな？」

マスミが情け無い表情でシンヤを盗み見ると、彼は盛大に笑声を上げた。

「そうだろう、そうだろう。友人の大切さが身に染みたか？——まあ、心配するな。近い内、俺の下に配属されるよう手を打ってやる。撃竜師範は無理でも、撃竜隊の小隊長くらいにはねじ込めるはずだ」

シンヤの言葉は、艦長の権限でということだ。これを、家格を笠に着ていると見るかどうかは微妙なところのように思えた。

「どちらにしろ、軍の再編はすぐに行われるはずだ。グロースの侵攻は数ヶ月の内と見られているからな。北か西かは分からないが、どちらかで一戦やらかした後に兵員の補充がある。俺たちの出番ってわけだな。その時には、煉国の時みたいにお前と轡を並べていたいもんだ」

シンヤはそう呑気に語ったが、マスミには例えようのない不安が生まれていた。

「なあ、シンヤ。そのグロース帝国の侵攻だけ……誰も彼も、北か西から来るものとはかり決め込んでいないかな？」

「おいおい。じゃあ、どこから来るって言うんだ。補給や輸送のことを考えれば、旧煉王国領から来るしかないだろう？」

「それはそうさ。でも、旧煉王国領——今はオストエンデ州だっけ？　そこから来るにしても、到達する場所が天津の北海や西海になるとは限らないだろう？」

呆れたような口ぶりのシンヤに、なおもマスミが言い募ると、シンヤはわずかに表情を歪めてマスミを見据えた。

「どうも、その口ぶりからすると、お前の考えるグロースの攻撃目標は——」

「そう、端琉島さ」

マスミはその言葉をはつきりと口にした。ごくり、とシンヤが唾を飲み込む音を耳しながら、先を続ける。

「空母を中心とした航空機動艦隊なら、天津海軍が索敵可能な海域を迂回して南から端琉

島を攻撃することができる。今のこの島には、グロースの攻撃に耐えるだけの戦力は残されていないからね。本土からの援軍だって間に合いはしないだろう。そうなれば、グロース側は労少なくして占領地を増やすことになる。端琉島を支配下に治めれば、天津本国への爆撃さえ可能になるんだ。戦略的価値だって少なくはないだろう」

熱っぽく語るマスマスの言葉に、シンヤはしばらく何事かを考え込んでいたが、

「……お前の考えすぎってことはないのか？」

「できれば僕もそう思いたいけどね。でも、今のオストエンデ州総督は……」

「高貴なる獅子……か」

現在のグロース帝国オストエンデ州総督は、エルリック・フォン・グロースという名の男であった。姓のグロースの名が示す通り、グロース皇帝の第三子にして第二帝位継承権を持つ、グロース帝国の皇子であった。

彼は、幼い頃から聡明さを囀られ、長じて主に軍事の面にその才覚を発揮した。五年前のスウブリマーツィア王国との戦争や、昨年うむの煉王国を併呑した戦争などで軍略の確かさを内外に示し、いつの頃からか高貴なる獅子と、そう呼ばれるようになったのだ。多分にプロパガンダの要因もあるのだろうが、彼の戦果とそれをもたらした軍才は侮れるものではないだろう。

「天津が帝国の侵攻を予期して、軍勢を集中させているには気付いているはずだ。そんな時、軍略の天才とも言われる人が、わざわざ正面から戦いを挑んでくるものだろうか？」

「お前の言うことはもつともだが……。しかし——」

シンヤは何事かを言いかけたが、最後まででは語らず、無言のまま首を振った。それでも、マスマスには友人の言いたいことが分かってしまった。おそらく彼は「それが分かったところで何ができる？」と言いつうになつたのだろう。だが、それを口にしては、ただ無力感だけが残るだろう。そうと分かっているからこそ、シンヤはあえて言葉をとめ、代わりに冗談めかした声で訊ねてきた。

「お前ならどうする？ 例えば……お前が天津全軍の指揮をとる立場だとしたら？」

「大それた想像だ」

友人の口調に合わせ肩をすくめつつも、マスマスの表情は一向に和らぐ気配がなかった。

「まあ、本当のところ、僕も考えなくてはなかった。でも……はつきり言って、どうしようもない。僕が想像した通り、端琉島を攻撃することがグロース帝国の戦略なら、現状の天津軍じゃ対処のしようがないんだ」

「なぜだ？ 例えば、今からでもこの島に戦力を集中させれば……」

「その時は、北か西の海から堂々と進撃してくるだろうさ。この島に戦力を集中させるってことは、どちらかの戦力が薄くなるってことだからね」

「なるほどな。天津とグロースとじゃあ、絶対的に戦力に差がありすぎるからな」

「そうなんだ。正面の主力艦隊を無視して端琉島に迂回攻撃をしかけるといふのは、一見、奇手奇策のように思えるかもしれないけれど、その本質は絶対的な大兵力を背景にした各

個撃破作戦だ。奇道ではなく常道、王道と言ってもいいだろうね。それに対抗するには、こちららも常道をとらなくてはならない。各個撃破されないように、戦力を集中させる——まさに、今、天津軍がやっていることがそれさ」

「天津の軍上層部もそれほど馬鹿じゃないってことか。しかし、そうなる endpoint 島……いや、俺たちはどうなる？」

「どうもこうもないよ。『死して祖国の礎となれ』ってあたりじゃないのかな？」

皮肉とも呆れとも諦観ともつかない微妙な笑みと共にマスマミは肩をすくめた。

「そんなのは願い下げだな。俺はもっと平凡でつまらない死に方をするつもりなんだ。死んで国の英雄にされるなんてまっぴらだ」

「おやおや。派手好きのシンヤとも思えない言葉だね」

「おお、そいつは誤解だ、友よ。俺が派手好きなんじゃなくて、派手が俺を好きなのさ」芝居がかったシンヤの軽口に、二人は同時に声をあげて笑った。状況は絶望的ではあったが、すべてを投げだし諦めてしまうほどに、彼らの精神は枯れてはいなかった。

「確かに、状況は厳しいが……まあ、なんとかなるだろう」

笑いを納めた後、シンヤは呑気としか言い様のない声で言う。

「俺たちは俺たちにできることをやればいい。案外、そういうことが活路を開くことになるものだからな」

樂觀主義の極みのような言葉であったが、不思議とシンヤの声には人を安心させる何か

があった。同じ台詞でもマスマミが言えばそういう印象は与えなかっただろう。以前より、シンヤには人を惹き付ける何か——言うなれば《将器》のようなものが窺えたのだ。

マスマミはそれを羨ましく、そして頼もしく思っていた。

「……そうだね。今、自分にできることを精一杯やる。それだけだ」

強い意志を込め、マスマミはシンヤの言葉に頷いた。

あるいは、この時の言葉こそ、その後の二人の数奇な運命と、激動してゆく天津の歴史を決定づけたものであったと言えるのかも知れない。

しかし、この時はまだ、歴史は沈黙を保ったまま、緩やかに流れていくかのように見えただけであった。

*

奇妙なものがあった。

いや。いた、と言うべきだろうか。

マスマミがシンヤと別れ、基地内にあてがわれた宿舍へと向かおうとした、その道すがらのことである。

廊下を歩くマスマミの目に映ったものは、わずかに開かれた扉と、その扉の間から首だけを突き出している少女の姿だった。

状況から察するに、部屋の中にいたその少女が、誰にも見付からぬように外の様子を窺っている、と言ったところで怪しすぎる。マスマミなどは、一度、他国の間者ではないのかと疑ったくらいだ。

しかし、そう疑うにしては、いくら何でも間が抜けすぎている。なにせ、その人物の注意は廊下の奥にばかり向かっており、手前から足音を忍ばせるでもなく普通に歩いてくるマスマミのことにまったく気付く様子もないのだ。

それに、その少女——と言っても、マスマミと同年代かわずかによく見られる——は、艶のある長い黒髪に深い黒眼。顔の造形も、生粋の天津人であるように思われた。

よく見れば、着ている着物も、柄は質素ながら質の良さそうな生地だった。どこか良家の子女なのかもしれない。

しかし、その彼女が軍施設の内部にいる理由となると、まるで見当もつかなかった。

「あの、お嬢さん？」

「ひゃうっ!？」

わずかに迷いはしたものの、本人に理由を訊ねるべくマスマミが言葉を投げかけると、少女の口から聞こえてきたのは、愛らしいとさえ思える裏返った悲鳴だった。

マスマミの声に振り返った少女は、青ざめた顔と大きく見開いた眼とでマスマミを凝視する。その表情には、怯えと言うには生易しすぎる明確な恐怖が見て取れた。

「み、見た……見たのですね？」

「は？」

見た、とは何のことだろう。自分が見たものと言えば、それこそこの少女の姿くらいのものだが、彼女の言葉はそれを指していたのか。

主語の抜けた少女の言葉に、マスマミは困惑しきっていた。いや、言葉だけではない。怯えきった少女の瞳や、何よりも奇妙な既視感がマスマミを困惑させていた。

《竜洞》で育ち、竜士たちの中で過ごしてきたマスマミに、外部の知人など教えるほどしかない。それが、この少女のような良家の子女となればなおさらだ。

出会える機会などない。だが、確かにどこかで出会った気がする。

マスマミが記憶を探り、その矛盾を解消させようとしているその時のことだった。

廊下の奥から、幾人かの話し声が聞こえてきた。おそらくは、基地に勤務する兵の集団なのだろう。

少女にもその声が聞こえたのか、はっと我に返ると、マスマミの姿と室内の様子、そして廊下とを幾度か見比べた。眉をひそめ、わずかに逡巡したかと思えば、その後。

少女はマスマミの腕をとり、無理矢理に部屋の中へと彼を引き込んだのだった。

「わっ、と。た、た……」

少女の突然の行動に、マスマミがバランスを崩し踏鞴を踏んでいる間にも、彼の背後では、と扉の閉まる音がする。もちろん、少女が閉めたものだった。彼女は、それだけの

行動ですべての気力を使い果たしてしまつたかのように、扉にもたれかかつて荒い息を吐いている。

少女の行動に驚かされたマスマミだったが、その驚愕は室内に入つて否応なく増した。その部屋は立派だつたのだ。あまりにも立派すぎる部屋と言うべきだろうか。

その手のことには疎いマスマミでさえも、一見して高価だと分かる調度品が並べられ、それでいて下品な印象は与えない。例えて言うのならば、王侯貴族の部屋のような……。

その時、マスマミはたと気付いた。思い出したのだ、この少女とどこで出会つたのかを。正確に言うのならば、出会つてはいなかった。一方的にマスマミが《見た》だけだ。

あれは、二年前。煉王国との戦に向かう前日のこと。都で行われた出征式において、居並ぶ軍服の群れに混ざり、マスマミはこの少女を見たのだ。

この少女は、天津煌国・煌王ヤマトの隣に立つていた――。

「あ……！ あなたは……いや、あなた様は、煌女アス——んごつ?！」

「いいいいいいいけませんっ！」

マスマミがその名を口にしかけた途端、少女はもの凄いい形相でマスマミの口を押さえてきた。「そ、そつ、その名を呼ぶのは、ゆ、許しません……つ！」

人違い……ではないようだ。この過敏な反応からしても、この少女が天津煌王の息女——煌女アス力であることに間違いはない。

しかし、その煌女が、なぜ姿を隠し、名を隠さねばならぬのか。そして、端琉島のように

な辺境の島の、それも軍事施設内にいるのか。

幾つかの考えがマスマミの中に浮かんで消えるが、そのどれもが不吉なもののように思えてならなかった。

マスマミが思考の淵に沈んでいる間に多少の落ち着きを取り戻したのか、煌女アス力は顔を赤らめつつマスマミの口から手を離し、幾度かの咳払いの後に口を開いた。

「な……名乗りなさい。あなたの名は何と申すのです?！」

「え? あ……はっ! じ、自分は天津煌国軍式等竜尉、竜洞マスマミであります」

直立不動の姿勢をとり、マスマミは煌女の問いに答えた。訳の分からぬ状況となつてしまつたが、ともかく目の前にいるのは、煌女殿下なのだ。

「そうですね……で、では竜洞式等竜尉に厳命します。お忘れなさい」

「はっ。……はあ?！」

一度は明瞭に返答をしたものの、その直後に自分でもそれと分かるほどに間の抜けた声を出してしまうマスマミであつた。

「あの……忘れるとは、つまり……?！」

「わたくしと会つたこと。ここで起こつたこと。すべてをです」

「他言無用と、そう仰るのですね。あなた様がそう言われるのであれば、もちろん従います。ですが、なぜそれほどまでに存在を隠さねばならぬのか、お教え頂くわけには参らぬのでしょうか?！」

訊ねはしたものの、マスマミには煌女の返答は予想がついていた。案の定、煌女は厳しい表情となり、小さく首を振った。

「なりません。あなたには、それを知る権限はないのです」

予想通りの内容ではあったが、その言葉に引つかかるものを覚えたマスマミである。

(……僕には権限がない？ 弐等竜尉程度じゃあ駄目ってことか？ つまり——)

つまりそれは、より上位の軍人であれば知り得る、知っていることである、ということであり、同時に彼女が軍の要請——あるいは命令によってこの場にいるということだ。

その事実は、先程のマスマミの不吉な考えを補強するものであり、増幅するものでもあった。嫌な予感が悪い予感になった、といったところであろうか。

「承知致しました。竜洞弐等竜尉、ご命令通りすべてを忘れませう」

マスマミの返答を聞いた時、煌女アスカはあからさまに安堵した顔付きとなった。それも道理だ。実のところ、《権限がない》のは彼女も同じだった。正式な軍の命令系統の中に彼女——いや、彼女に限らず、煌家の人間は存在しない。実情はともかくとしても、マスマミが否と答えれば、それを覆すだけの《力》を持ってはいなかった。

天津煌国の頂点に君臨しながらも、煌王や煌家とはそういった存在なのである。

「では、失礼させて頂いてよろしいでしょうか？」

「え、ええ……。き、許可します」

硬く強張った表情で言うアスカの声はわずかに震えていた。存外、その生まれにも拘わ

らず他者に命令を下すということに慣れていないのかも知れない。

なにやら、精一杯背伸びをして大人ぶっている子供のような印象さえ受け、マスマミは微笑ましくなってしまったほどだ。シンヤなどのごく一部の例外を除き、高い身分の者による印象を持っていなかったマスマミではあったが、この煌女には素直な好感が持てたのだ。た。

「あつ。あの……」

部屋の扉に手をかけたマスマミに、アスカが再び震えた声をかけてきた。彼女が何を言わんとしているのか予想できたマスマミは、振り返ると同時に顔に微笑を浮かべ頷いた。

「ええ、承知しております。誰にも見られぬように、ですね？」

「あ。え……ええ。お願い申します」

やや啞然とした表情でそう言うアスカの声を背に、マスマミは先程彼女がしていたように、わずかに扉を開け、廊下の様子を探る。先の兵の一団も通り過ぎ、周囲には誰もいる様子はない。元々、北西方の増員に伴い、この南海諸島艦隊司令部は閑散とした有様となっているのだ。余程のことがなければ、誰かに見咎められるようなこともないだろう。

確認し、ひとつ頷いたマスマミは、素早く室外へと出ようとした——と、その時である。

「お、お待ち下さい！」

またしてもアスカが呼び止めたのだ。マスマミは、今度ばかりは彼女の意図が分からず、きよとんとした表情で振り返った。

「まだ、何か？」

「え、えと。えっと……」

アスカは忙しなげに周囲をきよろきよろと見回し、何かを探している様子であった。訳が分からずマスマミが首を傾げている間に、アスカは部屋の奥へと駆け込んでいくと、掌大ほどの小さな紙箱を持って戻ってくる。

「こっ、これを！」

アスカはその紙箱を押しつけるようにマスマミに手渡した。

「は？ あの、これは……小官に御下賜頂けるといふことでしょうか？」

「ええ。お……お持ちなさい」

どういふつもりなのだろう。まさか、口止め料のつもりなのだろうか。煌女ともあろう者がそんな俗な考え方をしているとは思いたくはなかったが、形式よつてのみその地位を保つ煌族の人間は、取引や駆け引きを好むという話を聞いたこともあった。それは、この純に見える煌女として例外ではないのだろうか……。

マスマミは、先程、煌女に感じた好感が萎むような気持ちになってしまった。

「謹んで拝領つかまつります」

口にしてはそう言ったものの、やや無然とした表情で紙箱を受け取るマスマミであった。

「では、くれぐれもよしなに願います」

不安交じりのアスカの声を背に、マスマミは素早く部屋を抜け出した。

しばらく黙々と廊下を歩いたところで小さく舌打ちをし、胡乱な目つきで手にした紙箱を眺める。

「慌てて持ち出して来たようだから、普段使いの宝飾の類つてところかな」

嘲弄の響きさえ含んだ声で、マスマミはひとりごちた。煌女の持ち物であるのだから、どうもなく見積もったところでマスマミには手の出せない高価なものであるのに間違いはない。まして、煌女殿下直々の御下賜品だ。本来なら、感涙の一つも浮かべるところなのだろうが、とてもそんな気にはなれなかった。

無然とした表情のまま、マスマミは紙箱を開く——と。

「……は？」

一瞬、眼を疑った。次いで、可笑しくなった。場所が場所でなかったら、哄笑していたところだったかもしれない。

「く、くくく……いや、まいったな。大変なものを頂いてしまったよ」

紙箱の中に入っていたのは、砂糖菓子だった。細工も細やかで、一見して腕のある職人の手によるものと分かる。が、問題はそこではない。

その砂糖菓子は食べかけだった。なんと、恐れ多くも、煌女殿下の歯形が刻み込まれていたのだ。

よほどアスカも慌てていたのだろう。そもそも、慣れていないのだ。あるいは、あの純な煌女は、煌家の慣習とはいささか異なるところにいるのかもしれない。

「何とも、おかしなお姫様だなあ」
含み笑いと共に洩らした一言は、誰かに聞き咎められれば不敬罪に問われるところであっただろう。

だが。
それはマスマミにとって、最大限の讃辞といってよかつたのだった。

*

「お前が竜洞マスマミだな？」

それが狗部トモエ参等狗尉の第一声だった。

南海諸島艦隊所属、竜巢艦《ナガヌキ》の船上でのことである。

マスマミは端瑠島に上陸したのもつかの間、わずか半日あまりで再び洋上の人となっていた。マスマミが撃竜師範として着任したこの日より、《ナガヌキ》は約一週間の練習航海へと出航していたのだ。

艦内の最も大きな空間であり、現在は十九騎の竜（正確には一騎の竜と十八騎の鳥竜）が居並ぶ竜巢庫において、マスマミは十八人の竜騎兵と引き合わされた。

狗部トモエの言葉は、彼女の第一声であっただけでなく、その十八名の竜騎兵の中での第一声でもあった。



異例……と言うよりは非常識なことである。《ナガヌキ》に所属する空戦部隊の中で、トモエは二名の部下を指揮する小隊長に過ぎない。その彼女が、全騎を統括する撃竜隊長を差し置いて発言するなど、本来あってはならないことだ。それを置いたとしても、彼女はマスマミよりも低位の参尉なのだ。このような口の利き方はない。

(なるほど。これが噂の狗部のご令嬢か。確かに跳ねっ返りだ)

だがマスマミは、昨日のシンヤの評を思い出し、憤るよりも苦笑が浮かんでしまった。

狗部トモエは今年で十六歳。艶やかな長い黒髪と整った顔立ちを持ち、美しい着物を着て押し黙っていれば深窓の令嬢として通用する……かと言えばそうでもない。やや吊り上がった切れ長の目に、細い鼻もわずかに上を向いている。その容貌は優美さよりも鋭利さを感じさせ、あたかも彼女自身の性格のキツさを表しているかのようだった。

「確かに僕が竜洞マスマミだが？」

「お前のことは調べさせてもらった。なんでも、《竜洞》に捨てられていた捨て子であつたぞうだな？」

トモエが言う通り、マスマミは生後間もない頃に竜士の本拠地とも言える《竜洞》の前に捨てられ、これまでの人生の大半を《竜洞》で竜と共に過ごしてきた。だが、そのことに対して、悲観的な思いを抱いたことは一度もない。

「そのような生まれも定かではない男が、式等竜尉とはな。竜部の家臣には余程に人材がないと見える」

嘲笑を浮かべるトモエに、彼女の周囲にいた取り巻きらしき竜騎兵たちが追従の笑みを浮かべていた。

「まして貴様は、先年の煉国との戦では一機の敵機を撃墜することもなく、ろくな戦果も挙げられなかったとか。それでよくも煌国将校だの、撃竜師範だのと恥ずかしげもなく名乗ってられるものよ」

トモエが愉快そうに笑い出せば、その取り巻きたちも、マスマミを嘲弄する言葉を並立て笑い合っていた。

いきなり公衆の面前で罵倒されたマスマミではあったが、腹立たしいと言うよりは呆れ果てていた。そもそも、捨て子として育ち、とある理由から竜士としても落第者の烙印を押されていたマスマミは、この手の嘲罵の声には慣らされてしまっていたのだ。とは言え、ひとつだけ解せないことがあった。

なぜ、今、トモエから罵られねばならないのか、ということだ。

確かに、狗部と竜部は政治的に対立する潜在的な敵同士ではあるが、だからと言って狗部の令嬢であるトモエが、マスマミのような『小物』を相手にして得られる益など何もないような気がするのだ。

「それもこれも、竜部の気取り屋の小僧の力というわけか？ よい友人を持っているようで実に羨望に値するな」

(……なんだ。そういうことか)

嫌味がましい言葉で疑問は氷解したが、喜ばしいわけではなく、むしろ苦々しい。
 (要するに、今、僕はシンヤのどばっちりを受けてることじゃないか)

大方、以前にシンヤがトモエの癩に障るようなことでも言ったのだろう。お互いに四天将の令息令嬢である二人なのだから、どこかで接点があっても奇妙しくはないし、将家の名と力を誇示したがるトモエのようなタイプの人間に対し、シンヤが嫌味のひとつも言ったであろうことは想像に難くない。

(やれやれ……。馬鹿らしい)

マスミは嘆息と共に、好意的とは言い難い視線をトモエに向けた。

「ところで、僕は君のことを知らぬのだが、まずは名乗られるべきではないのかな？」

「何？」

マスミの言葉に、トモエはまず驚き、すぐさま不快げに眉をひそめた。それは、なぜ自分のことを知らないのかと、マスミを責める表情だった。マスミとて、彼女が何者であるのかなど承知の上だったが、そのような傲慢さにつきあってやる気はなかったのだ。

「……よかろう。わたしは、西狗公・狗部が三女、狗部トモエだ」

どうだ恐れ入ったか、とでも言わんばかりの表情と声色だった。半ばその名乗り方を予想していたとはいえ、マスミは彼女の言葉を聞き、嘆息を禁じえなかった。

「そうではないだろう。ここは君の家でもなければ、社交界のパーティの席上でもない。僕が知りたいのは、君がどこのどなたさまのご令嬢であるかということではない。官姓名

を名乗りたまえと言っているんだよ」

顔を合わせて未だ数分と経っていないが、早くもマスミはこの傲慢な令嬢に呆れ返っていた。それでも、必要以上に敵意を買うつもりもなく、淡々と抑えた声で訊ねたのだが、残念ながらそれは無駄に終わったようだ。トモエはあからさまに憎々しげな視線をマスミに向けていた。

「わ、わたしは《ナガヌキ》撃竜隊第式中隊第式小隊長、狗部トモエ参等狗尉である」

「そうかい。では、狗部参尉。僕は撃竜師範であって、君を直接指揮し、命令を下せる立場にはない。だが、役職によって、君を指導していかねばならない立場ではある。よって、早速ではあるが、君にひとつ教えておこう」

「な、何……を？」

「君は今、口を開く必要はないということをだよ。あと、上官に対して、口の利き方になっていないということもかな」

「な……っ!？」

マスミの言葉に、トモエは弾かれたように目を見開いた。そして、顔を朱に染めると、握り締めた拳を震わせた。侮辱を受けた——と、そう感じたのだろうか。

マスミの言葉が衝撃を与えたのは、何もトモエだけではなかった。その場にいた、トモエを除く十七名の竜騎兵たちは、皆一様にざわめいた。騒然となったといっている。

おそらくは皆、マスミとは真逆のことを考えていたのだ。《口の利き方になっていない》

のはマスマミの方だと。分らない話ではない。なにせ、相手は四天将・西狗公の息女なのだ。世が世なら、マスマミはこの場で首を刎ねられていてもおかしくはなかった。事実、トモエの周囲にいる幾人かの竜騎兵たちが、彼女と同様の憎しみをこめた瞳でマスマミを睨み付けている。狗部子飼いの兵なのだろう。

(……でも今は、世は世じゃあない)

少なくとも、この場で正しいのはマスマミの方だ。マスマミは、いつまでも旧態依然の制度を引きずっているこの国のありように真っ向から立ち向かったのだ——と言うのであれば、格好もつくだらうが、実のところ、この時のマスマミには、目の前の小生意気な少女に少しばかり恥をかかせてやりたい、という程度の考えしかなかったのだから、あまり威張れた話でもなかったのだが。

とりあえず、マスマミのちつぽけな反骨心は満足のいく結果となった。彼の指導に従った……わけではないのだろうが、トモエはそれ以上何を言うこともなく引き下がった。

しかし、マスマミがなんとも遣る瀬ない気持ちになってしまったのは、撃竜隊長が解散を命じた後、その撃竜隊長に呼び寄せられた時のことだった。

「今後、ああいっただ態度はとるな」

と、撃竜隊長が直々に、先のマスマミの言動を咎めたのだ。

まあ、それも仕方がないことなのかもしれない。この撃竜隊長は、柴原という名の壹等狗尉で、その家印階級が示す通り、狗部家の《家臣》であった。主君の令嬢に対し、生意

気な口を利いたマスマミを快く思う道理がない。あるいは、柴原撃竜隊長自身、トモエの扱いに頭を悩ませているのかもしれない。不用意に彼女を刺激したマスマミに対し、小言のひとつも言ってみたくなくなったのだろうか。

マスマミはすっかりと失念していたが、この《ナガヌキ》は、主に南亀州出身の将兵で運用され、そこに所属する撃竜隊は西狗州の出身者が多かった。

狗部と竜部は、四天将の中でも政治闘争による対立が多かった歴史的な敵同士であり、先の南亀叛乱に見られるように、南亀州は竜の被害を最も受けた地方であった。

つまり、東竜公麾下の竜士であるマスマミにとって、南亀と西狗とで構成されるこの艦は、半ば敵地じみた雰囲気を持っていたのである。

もちろん、マスマミ自身には西狗にも南亀にも遺恨はない。ないが、マスマミが式等《竜尉》である以上、避けられない軋轢なものだった。

『ヒトの世というものは、何とも面倒なものだね』

ふてくされるようにして竜巢庫を後にしようとしていたマスマミに、苦笑とも嘲笑ともつかない声……いや、声ならぬ声がかかった。

耳にはなく、直接脳に響いてくるような声。俗に、《沁話》と呼ばれる声であった。

「……ジャッコウ。聞いていたのかい？」

その沁声の主をマスマミは見上げた。竜巢庫の片隅に純白の鱗を持つ一騎の竜が蹲り、純度の高い宝石のような瞳でマスマミを見下ろしていたのだ。

その竜こそ、マスマミの愛騎、ビヤッコウであった。
 『正しくは、《聞こえていた》だね。私には、ヒトの話を盗み聞きする趣味はないよ』
 人を食ったようなビヤッコウの物言いに、マスマミは軽く肩をすくめて応じる。
 『まあ、どちらでもいいさ。とにかく聞こえていたのなら、面倒は起こさなくてくれよ。これ以上の厄介事はごめんだからね』

『面倒!? 私がか?』

ビヤッコウは意外そうに眼を見開き、マスマミを見据えた。幻獣とも魔獣とも呼ばれ、神祕性を保っているように思える彼らではあるが、こういった反応は何とも人間じみて見えるものだ。

『着任早々に上官から叱られた者の言えた台詞ではないと思わないかい、マスマミ?』
 皮肉げなビヤッコウの言葉に、思わずマスマミは言葉に詰まってしまう。それで気をよくしたのか、ビヤッコウは意地悪げに、そして楽しげになおも言い募った。

『まあ、気持ちは分らないではない。君は大人しそうな外見に反して、つまらないプライドだけは高いときているのだからね』

『それはお互い様だろう。いいや、つまらないプライドなら、断然君の方が上だね。鳥竜と同じ部隊なんて嫌だって、駄々をこねたのはどこの誰だったっけね?』
 マスマミの反撃に対し、ビヤッコウはあからさまに表情を歪めた。人間であるのなら、不満げに唇を突き出したといったところなのだろう。

『誤解を招くような言い方はして欲しくないものだね。私は、鳥竜と同じ部隊になるのを嫌がったわけではなく、鳥竜と一緒に扱われ、同一視されるのは我慢ならないと言っただけだ』

『似たようなものだろう?』

『まるで違う!』

がう、と短い咆哮を上げながらビヤッコウは主張した。冗話であるのだから、何も声帯を震わせる必要はないのだが、それだけ彼にとって不愉快なことなのだろう。

『分かった分かった。分かったから、艦内で咆哮のは勘弁してくれよ』

竜の咆哮には物理的な力がある。それこそが、重火器を搭載した戦闘機と互角に戦える所以なのであるが、だからこそこのような場所で不用意に咆哮ばれては堪らない。ビヤッコウの咆哮と共に巻き起こった衝撃で、竜巢庫内の空気がびりびりと震え、慣れているマスマミさえもはじき飛ばされてしまうところだったのだ。

『む。私としたことが……』

ビヤッコウは恥じ入るように首を振った。落ち着いているように見せてはいるが、実のところ、ビヤッコウは竜の中ではまだまだ若年であり、血気盛んな年頃なのだ。

『しかしだね、君だとして「お前は猿だ」と言われれば、腹の一つも立てるだろう。我々にとって、鳥竜と同一視されるということは、それと同じことなのだ』

(……それを、つまらないプライドと言うのじゃあないのかな?)

ふと、そんなことを考えてしまうマスマミではあったが、それを口から出すことはなく、代わりに軽く肩をすくめる。

「ここは軍だからね。軍隊ってのはつまりはそういうところさ」

軍隊という組織は、往々にして個人が思考を放棄することを望むものだ。それは、人間に、猿になれと命じることにも似ていた。

『やはり、ヒトの世というものは、何とも面倒なものだね』

ビヤッコウは先程と同じ台詞を、先程よりも明確な嘲弄の響きをもって沁声にした。

『しかしだね、マスマミ。君は、その面倒さを分かっているのだったら、先程のナントカ言う娘に対しての言動はなかったのではないのかな？』

「それは違うよ。僕は軍の原理に従っているだけさ。もちろん、それを素晴らしいと言っているわけではなく、郷に入っては郷に従うという意味だね。なのに、彼女——狗部参尉は、別の原理を持ち込んで当然のような顔をしている。それはいつか正されなきゃならないことだ。その《いつか》がたまたま今で、たまたま僕に機会があっただけの話だよ」

理路整然と話しているように思えるが、マスマミの表情はどことなくむくれていて、むしろ屁理屈のようにさえ聞こえてしまう。その様を見て、ビヤッコウはくすくすと笑い声を上げていた。

『つまり君は、「自分は間違っていない」と言いたいわけだ。やはり、つまらないプライドが高いじゃないか』

「事実、僕は間違ったことは言っていない」

胸を張り、そう言っただけのマスマミではあったが、その直後、頭を掻きながら苦笑いを浮かべてしまっていた。

「……と思うんだけれどね。やっぱり、ちょっと失敗だったかもなあ」

周囲の状況を見るに、そう思わざるを得ないマスマミであった。

竜巢庫には、竜士や竜騎兵の他にも、常時、何名かの兵士が詰めている。主に、整竜兵という竜巢庫内の竜や鳥竜の世話をする者であるが、その彼らが先程から、マスマミに向けて警戒とも敬遠ともつかない視線を投げかけていたのだ。先のトモエとの遣り取りを耳にし、《厄介者だ》という印象を受けたのだろう。

「なに、そうとは限りませんが、撃竜師範殿」

その時、マスマミの耳に届いたのは、どこか人を喰ったような印象のある声だった。声の方を向けば、そこにはやはり人を喰ったような印象のある笑みを浮かべた一人の青年が立っている。

「……君は？」

「撃竜隊第式中隊第参小队所属竜騎兵の鹿喰コウタ武等亀曹であります」

青年——鹿喰武等亀曹は、マスマミに向かい敬礼を掲げたが、それはとても規範通りとは呼べぬ、有り体に言ってやる気のなさそうな敬礼であった。もっとも、マスマミは彼の敬礼が気になるよりも先に、その家印階級の方に気をとられてしまっていた。

「式等……龜曹？ 君は南龜の出身なのかい？」

「ええ。この島から一番近い本土の港町の出でありますよ。ま、近いとは言っても遙か海の彼方ではありますかね」

「いや、驚いた……。てっきり竜騎兵に南龜の人間はいないものだと思ひ込んでいたよ」「無理ありませんな。少なくともこの艦じゃ俺一人だし、艦内の人間には裏切り者のような目で見られていますよ」

肩をすくめながら、それでもどこか楽しみに鹿喰は言つてのけた。

これまで、度々話に出たように、天津の歴史上、南龜州は最も竜の攻撃を受けた地方であり、南龜の人間の竜に対する恐怖と憎悪は並々ならぬものがあつた。

そんな南龜の人間の中で、おめおめと竜騎兵となつた鹿喰に対し、他者の風当たりが強いのも当然の話だろう。

「あ。ちなみに言つておくと、俺は志願したんすよ」

なるほど、この鹿喰という男、相当な変わり者のようだ。マスマは、次第に彼に対する興味が湧いてくる自分を自覚していた。

「ほほう。なかなか変わったニンゲンじゃないか、マスマ。これは、類は友を呼ぶというヤツなのかもしれないね」

似たような印象を受けたものか、ビヤッコウが笑いを堪えているような沁声を出す。

「その類友の中に自分がいることは自覚しているのかい？」

「うむ……」

思わぬ反撃を受け、面白くなさそうに口を嚙むビヤッコウであつた。

「あの……式尉殿？ 今、この竜と話を？」

二人の（正しくは、一人と一体の）様子を見て、鹿喰が怪訝そうな表情で訊ねてきた。

「ああ、そうか。君は……」

南龜に生まれ、竜騎兵としても鳥竜としか関わつてこなかった鹿喰は、沁話のことを知らないのかもしれない。いや、知識としては伝わっているのだろうが、実感をしていないか、あるいはお伽噺のようなものだと思つている可能性もある。基本的に沁話は一対一で行われる（つまり、会話の相手にしか沁声が聞こえない）ため、天津人の中にも竜と話ができるなどとは思っていない者も多いのだ。

「紹介しておくよ、鹿喰式曹。これが、僕の愛騎ビヤッコウだ」

「これとはご挨拶だな、マスマ。まあ、ともかく——」

ビヤッコウはマスマをひと睨みした後、視線を鹿喰へと移し、

「私がビヤッコウだ。以後、よろしく頼むよ、鹿喰式等龜曹」

「うおおっ！」

沁声を聞いた鹿喰は頓狂な声を上げてビヤッコウを見上げた。生まれて初めて竜の沁声を聞いたのだから無理もない反応ではあるが、やはりどこか滑稽でもあつた。

「い、今のは、お前……か？」

『そう、確かに私だ。しかし、《お前》という呼ばれ方はあまり好みではないのだがね。私は一応、そのマスマミの相棒であるわけだから、彼に準じた対応をして欲しいものだよ』

「あ、こりゃ……すいません」

『いや、別に構わないがね。以後、気を付けてくれたまえ』
 「何を偉そうに……」

二人の会話を聞いていたマスマミは（もちろん、ビヤッコウがマスマミにも聞こえるように沁声をだしていたのだ）、半眼をビヤッコウへ向けた後、鹿喰に苦笑を向けた。

「すまないね、式曹。まあ、見ての通りのヤツだが、よろしくしてくれると助かる」

「え？ あ、ああ……いや驚きました。話には聞いていたんですが……」

ぽろぽろとときついていた鹿喰は、落ち着きを取り戻そうとするかのように何度か頭を振ると、ビヤッコウへ向かい直立不動の姿勢をとった。

「失礼致しました、ビヤッコウ殿！ 小官は《ナガヌキ》撃竜隊第式中隊第参小队所属、鹿喰コウタ式等亀曹であります。以後、よろしくお願いいたします！」

と、鹿喰は正に上官に対する礼をもつて、名乗ったのである。

『ふむ。こちらこそ、よろしく頼むよ』

「はっ。光栄であります！」

鹿喰がどこまで本気なのかは分からないが、少なくともビヤッコウのプライドは満足し

たようではある。

「鹿喰式曹、頼むからその辺にしておいてくれよ。ビヤッコウに変に味をしめられても困るからね」

「いやいや、式等竜尉殿。俺は本気ですよ。感動したと言ってもいい。鳥竜を知った時は、所詮は獣かと思っただけですが、やはりホンモノは違いますね」

何か妙な感銘を受けてしまった鹿喰に、マスマミは苦笑を禁じ得なかったが、ビヤッコウはますます気分を良くしたようであった。

『その通りだよ、式曹。我々を鳥竜などと一緒にしては欲しくないね。ふむ、どこにでも見る目のある人物はいるものだ。マスマミ、君も少しは式曹を見習ったらどうだい？』

「分かった分かった。考えておくれよ」

これ以上、話を続けても、ビヤッコウを調子に乗らせるだけだと感じたマスマミは、些ちとか強引ながら話を打ち切った。

「ところで、式曹。君は僕に何か話があったのじゃあないのかい？」

「え？ ああ、大したことじゃありません。単に式等竜尉殿に礼を言おうと思っただけです。先程の狗部参等狗尉との遣り取りのことですよ。正直、俺もあの高慢ちきなお嬢の態度には頭にきていたところなんです。だから、式等竜尉殿があいつをやり込めて下さって気分が良かったですよ」

「だから礼を？ それだけのために僕に声をかけてきたのかい」

「それだけっちゃあそれだけですかね。ああいった反骨心のある人は好きなんで、仲良くさせてもらおうかと思ひましてね。それに、弐尉殿は撃竜師範ですからね、明日からの訓練のことを考えても、交誼を得ておくことに損はないでしょう?」

「なるほどね。そういう打算は嫌いじゃないよ。それに、僕としてもこの艦で孤立せずに済みそう度少しは安心したよ」

「そう言って頂けると、声をかけた甲斐があるってもんですな」

陽気に笑う鹿喰に向かい、マスミは手を差し伸べる。

「今後ともよろしく頼むよ」

「こちらこそ、ご指導のほどよろしく願います」

二人は階級の差などないように、笑い合い、握手を交わし合った。

ジャッコウのがう、という短い鳴き声が二人の笑い声に重なる。

こうして、マスミの《ナガヌキ》での日々が始まったのであった。

*

「……どう思うジャッコウ?」

『どうもこうも……他者の意見を求める必要があるとは思えんがね。一目瞭然ではないか』

苦々しいマスミの問いに、呆れ返ったジャッコウの沁声が答えた。

「ああ……そうだね、確かに一目瞭然だ」

マスミは頭を抱えなくなるような心地で、眼前の光景を見やった。

《ナガヌキ》が端琉島を出航して、一週間が過ぎ去っていた。あと数時間もすれば、端琉島に帰港する予定となっていた。

この一週間は、これと言って何もない日々だったと言って良い。そもそも、この練習航海に目的らしい目的は存在していなかったのだ。

《ナガヌキ》は、つい先年まで輸送艦として運用されていた艦であり、この度の竜騎兵の増員に伴い急速、竜巢艦として改修された艦である。そのため、艦長を含め乗員も竜に慣れてはおらず、その確な運用なども未だ手探り状態であった。だから、この航海にも、とりあえず竜を乗せて航海してみようという程度の目的しかなく、多くの者にとっては軍艦とは思えぬ気楽な航海であった。……一部の例外を除いて。

その一部の例外であるところのマスミは、撃竜師範として《ナガヌキ》撃竜隊の練度を気にしなければならぬ立場にあったのだ。

この日は、練習航海最後の日であり、撃竜隊にとっても航海中、最後の訓練日であった。元より不安の大きかった竜騎兵ではあるが、その実物を目にした時、マスミの中の不安は確信へと変わった。

はっきりと言ってしまうえば。

「これじゃ駄目だ」
ということになる。

海上より二千米ほど上空を飛び回る竜騎兵の群れを、マスマはそれより二百米ほど上空から見下ろしていた。各人二人ひと組となって、訓練相手に対し有利な位置取りをしようと、躍起になって上昇、下降、旋回を繰り返している。その行動はある意味では正しい。だが、致命的に間違ってもいる。

『あれは、竜の戦い方ではないね』

嘆息交じりとしか言い様のないビヤッコウの沁声こゑがマスマに届く。

まさにその通りだ。今、竜騎兵たちが訓練し、おそらくは実戦でも実践しようとしているのは、竜を駆る者の戦い方ではなく、航空戦闘機の戦い方なのだ。

敵戦闘機五機に相当すると言われる竜であるが、何も無条件に竜のすべてが航空戦闘機に勝っているわけではない。航空機にはできない動きをし、航空機では使えない戦法によって戦うからこそ、竜の優位が成立しているのだ。

まして、戦闘機五機分と言われたのは、二年前の煉王国との戦争時のことである。かつて大国と呼ばれた煉王国ではあるが、末期には諸国の技術革新についていけず、軍用機ほとんどは他国から買い取ったものであった。例えば、天煉戦争時、煉王国側の主力戦闘機となっていた『銀海』は、元はと言えばグロース帝国の二代前の主力戦闘機『ヴェックター・H-86A』を輸入したものであり、二年前には既に老朽化していたといっても

過言ではない。そのような戦闘機にわずかの優位を示したところで、グロースの新鋭戦闘機相手に、同様の優位が確立できるかと言えば、疑わしいところである。

しかし、それでもまだ竜の方が上だと、マスマは考えていた。余程の革命的な新技術でも開発されない限り、後十年は竜の優位は動かないだろうとも。しかし、絶対的な優位だとも思っていない。何よりも重要なのは、竜を竜として運用することだ。

竜騎兵たちのように、竜を航空機のように操っているようでは、竜は優位どころか、生物としての弱点を晒さらし、後一年の間にもその差が逆転することになってしまうだろう。

竜騎兵たちの多くがそのような戦い方をするのには理由がある。竜騎兵の大量増員に伴い、竜騎兵となる者たちを指導・訓練するために、天津各地に撃竜予備校が設置された。信じられぬことではあるが、その撃竜予備校に教官として招かれた者の中に、竜を駆り実戦をくり抜けた竜士はただの一人として存在していなかった。代わりに教官となったのは、グロースに伍する技術大国であり、天津の同盟国でもあるイヴァールズ王国から招聘しょうへいされた航空士官だったのである。

なぜこのようなことになったのかと言えば、それはもう天津の政治としか言い様がない。竜士とは東竜公麾下きよかの者たちであるため、その竜士を教官とし竜騎兵を訓練することを他の将家が嫌ったのである。少しでも冷静なものならば、その馬鹿馬鹿ばかばかしさに気付くところではあるが、この当時の天津焔国はもう二百五十年にもわたり、その馬鹿げた意地の張り合いを続けてきているのだ。既に、後戻りはできないうところまで来ているのだらう。

そのことはマスミも理解してはいたが、だからといって納得できるものでもない。権力者たちの意地の張り合いは、末端の兵士たちや一般民衆を犠牲にして成り立つものなのだ。実際、グロース帝国との本格的な空戦が起きた時、増員され新編された多数の竜騎兵たちは、一体、何人が生き残れるものだろうか。

『どうにかするべきではないのかね、マスミ。君は撃竜師範とやらなのだろうか？』
「できるものなら、とうの昔にやってるよ」

実のところ、この一週間、マスミは撃竜師範らしいことを何一つやっていなかった。いや、させてもらえなかったというのが正しい。

やはり、初日に狗部トモエと衝突したのが失敗だったと言わざるを得ないだろう。トモエはマスミを嫌い、彼の言うことなどはなから聞こうとはせず、他の竜騎兵たちも狗部令嬢の不興を買うのを恐れ、マスミを無視し続けている。部隊長である柴原壱尉でさえもそうなのだから、手の施しようがなかった。唯一の例外は、当人から交誼を求めてきた鹿喰式曹だが、彼一人を鍛えたところで、隊全体の練度がどうなるというものでもない。

すべてを投げだし、腐ってしまいたいくらいだった。おそらく、マスミでなかったらそうしていただろう。端琉島が攻撃目標になることなどないと信じ込んで多くの者たちであるのなら……。

マスミは臍を噛む思いだった。遅くとも数ヶ月の内に、早ければ明日にでもグロース帝国の侵攻は始まる。それは、天津軍上層部も考える既定の路線であった。それまでに、一

人でも多くの竜騎兵を、グロースの最新鋭戦闘機と互角に戦えるように鍛え上げるのが、撃竜師範たるマスミの役目だ。そのためには、いくら時間があっても足りはしない。つまらない人間関係にまずまっている場合ではなかったのだ。

「撃竜師範としての役職により、諸君らに言うておくべきことがある」
マスミが意を決したのは、最後の訓練終了後のことであった。

竜巢庫に戻り、柴原撃竜隊長が解散を命じる直前。マスミは強引に居並ぶ竜騎兵たちの前に出ると、彼らに向かい口を開いた。

「……竜洞式等竜尉。貴官に発言を許可した覚えはないが？」
あまりにも強引すぎた彼の登場に、柴原は眉を擡め苦言を呈する。が、その程度で怯むほどマスミの決意は弱いものではなかった。

「申し訳ありません、撃竜隊長殿。ご叱責は当然のことではあります。撃竜師範として看過し得ないことなのです。煌軍にとり、また御国のためにも必要なことであると信じております」

半ば以上、マスミの言葉はでまかせだった。彼は口で言うほどに、軍や国のことを考えてはいない。むしろ、御国のためとか、愛国心とかいう言葉を聞くと、奮起するよりもソップを向いてしまいたくなる方だった。だが、あるいはだからこそ、目的のために国の名を利用することにわずかな抵抗も感じてはいなかった。

「うむう……」

柴原は頷きとも唸り声ともつかない言葉を漏らしたが、それ以上何も言わないところをみると、マスミの行動を是としたようである。彼のでまかせを信じたというよりは、《撃竜師範として看過し得ないこと》という言葉が気になったのだろう。

竜騎兵としては新兵も同然だが、柴原は三十半ばの士官であり、軍歴も長い。そのため、自身と隊の練度に不安を覚えているのかもしれない。

曖昧ではあったが、柴原の了承を得て、再びマスミが口を開こうとした時、

「黙れ！」

甲高い、ヒステリックな声が聞こえてきた。

むろん、トモエのものだ。彼女が口を挟んでくるであろうことは、予想の範囲内であったとは言え、やはり不快さは禁じ得なかった。

「我ら狗部の士が、貴様のような男に何かを教授される必要などないわ！」

声高に叫ぶトモエに対し、マスミはいつになく強い声を叩き付ける。

「黙るのは君だ、狗部参等狗尉。必要であるかどうかは君が決めることではない」

「なん、だと……!?!」

トモエは一瞬、自分に向けられた言葉を理解していないかのように、瞳を瞬かせた。これほどまでに攻撃的な言葉突きつけられたのは初めてなのだろう。

「き、貴様……よくもこのわたしに向かつて、そのような口の利き方を……!」

「相変わらずひどい勘違いをしているね、君は。ここは軍艦であって、君の家の庭じゃな

い。そして、僕は武尉で君は参尉だ。つまり、僕は君に対してこういう口の利き方をする権限を有しているということだ」

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れえええ……っ！」

狂乱したかのような叫びと共にトモエがとった行動を見て、マスミの表情も改まらざるを得なかった。

「よせ。君が刀に手をかけるのなら、僕もそれなりの対応を取らざるを得なくなる」

真剣な面持ちで身構えながら、マスミは内心で舌打ちを加えた。トモエの行動に呼応して、周囲の竜騎兵の幾人かが、自らの得物に手をかけている。中には、拳銃を抜き放ちマスミに銃口を向けているものさえもいた。

「それなりの対応とはどういったものか、見せて頂きたいものだな、撃竜師範殿？」

周囲に多数の味方を得、気を強くし、また多少の落ち着きも取り戻したのか、トモエは嘲るような口調でマスミに問うた。

「……いいだろう」

マスミはすっと針のように目を細め、トモエを見据えた。家の力を自身の力と思い増長し、周囲に味方がいれば大層な口を利く。トモエの下劣とも言える言動に、マスミも我慢がなくなっていたのだ。

「ビヤッコウっ！」

マスミは大きく息を吸うと、力の限りの大声でその名を呼んだ。

瞬間。待ちかねたと云わんばかりの咆哮が竜巢庫に響き渡る。竜の咆哮に伴う衝撃波は、直撃すれば戦闘機さえ爆散させる威力を持った竜の主武装でもあった。当然、人間などひとたまりもない。むろん、そのあたりはことはジャッコウも心得ている。彼の放った咆哮は、竜巢庫の床へと叩き付けられ、鉄製の床を拉げさせた。が、その余波で巻き起こった暴風とも言える空気の渦が、トモエとその周囲の竜騎兵へ襲いかかり、彼女たちを地面に転げさせたのだった。

マスマスはゆっくりとトモエに近付き、倒れ伏す彼女を見下ろした。

「見ての通り、これが僕のそれなりの対応なのだが、感想はどうだい？」

「く……っ。ひ、卑劣な……！」

「なるほど。竜の力を借りたのが、ということだね。だが、君に言えた台詞ではないだろう。君自身、狗部家という借り物の力を利用し、好き勝手振る舞っているじゃないか」

「わ、わたしは狗部の娘だ！ 借り物の力などではないっ！」

「借り物だよ。君はたまたま狗部家に生まれただけであって、君個人の能力とはなんら関わりのないことだ。なに、恥じ入ることはない。君が狗部の力を盾にするのは、不快ではあるけど、非難には値しないよ。仮令借り物であろうとも、自分の持てる力を最大限に利用するのは、至極当然のことだからね。ただ、君がその力の有用性と限界に対して無自覚だったのが、失敗というか……敗因ってことかな」

苦笑を浮かべながらそう口にするマスマスだったが、その声には隠しようもない嘲笑の響

きが含まれていた。

「それに、竜と竜士は一心同体と言うからね。僕が自分の竜の力を使うのは、まあ……百歩譲って自分の力ということにもなるかもしれないだろう？」

「……一心同体？ ならば、なぜお前は生きているんだ？」

「何だって？」

憎しみに濁った瞳をマスマスに向けながら、暗い笑みと共に口にしたトモエの言葉に、マスマスは聞き捨てならないものを感じた。

「竜と竜士は一心同体なのだろう？ ならば、なぜ竜を殺したお前がおめおめと一人生き残っているのだ！」

「な——っ!？」

叩き付けられた言葉に、マスマスは目を見開き、一歩後退した。マスマスの動揺を見て取り、好機だと感じたのか、トモエは身を起こしながらなおも言い募ってくる。

「お前のことは調べさせてもらったと言っただろう、竜洞マスマス……。いや、竜屠のマスミと呼んだ方がよいのか？」

「竜屠——それは、竜士にとって最も不名誉な名である。」

竜士は、見習いとなった時に、一体の竜を与えられ、終生を共にする誓いを交わす。竜と共に生き、竜と共に死ぬのが竜士の誇りであり、同時に竜の誇りでもあった。

竜を失った竜士は他の竜士から蔑まれ、竜士として最も低い評価を下されるようになる。

しかし、竜士以上に「竜屠」を蔑むのは、他でもない同胞を失った竜である。プライドの高い彼らは、「竜屠」に自らの背を預けたりしない。つまり、一度竜を失った竜士は、二度と竜を駆り、天を翔ることなど望めなかった。竜のいない竜士に一体、どんな価値があると云うのだろうか。だからこそ、誓いを交わした竜が死ぬことは竜士の死をも意味していたのだ。《竜洞》に残された記録を見ても、不慮の事故や、やむを得ない事情により竜を失った竜士が、その身を恥じて命を絶つ例など、いくらでも残っていた。

その中で、一度誓いを交わした竜を失ったにも拘わらず、ビヤッコウという新たな愛騎を得ることのできたマスミは、竜士史上でも希有な例と言えるだろう。

だが、だからといって、マスミの犯した「竜屠」の罪が消えてなくなるわけではない。

「僕、は……」

その一事を持ち出されては、さすがのマスミも冷静ではいらなかった。狼狽し、口を噤む彼を見て、勝ち誇ったかのような笑みを浮かべてトモエが立ち上がった――。

その時である。

竜巢庫に……いや、竜巢艦《ナガヌキ》中に、警報が鳴り響いた。

その危機感を煽る甲高い音に、マスミもはたと我に返り、何事が起きたのかと周囲を見回した。マスミだけではない。竜巢庫にいた誰もが、警報の正体を探ろうとばかりに、あてもなく周囲に視線を彷徨わせたり、幾人かで顔を見合わせたりしていた。

そこへ、甲板上から駆け込んできたと思われる一人の兵が、息を切らせつつも竜巢庫内

に響くほどの大声で叫んだのだった。

「大変だ！ 端琉島が燃えている！ グロース軍の奇襲だっ！」

時に、煌暦二五二五年九月六日、午前一〇時一八分のことであった。





最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！